「いいかげんにしろ！」

声と同時に宙を舞ったのはソファだった。

ガシャーン！

開き戸のガラスが割れる音を聞きながら、有希は階段を駆け降りた。

急いで靴を履き、玄関のドアを開けた瞬間、階段の上から何かが降ってきた。鳥カゴだった。

「……すまん」

驚いて羽をバタつかせている鳥を横目で見て、有希は後ろ手にすばやくドアを閉めた。

大みそかの夜。

台所でおせちのしたくをしている母親に、すっかり身じたくを整えて有希は言った。

「友達と初詣に行ってくる」

「ちょっと待ちなさい」

予想どおりの答えが返ってきた。誕生日にクリスマス、大みそかにお正月……。母親にとって、年中行事は家族で過ごすものと決まっていた。だが、今の有希には、もっと大切なものがある。

そして、いつものケンカが始めた。

性格が似ているせいか、母、亮子と有希のケンカは絶えることがなかった。たいていは有希が嘘をついたり、言いつけを守らなかったりすることが原因だったが、カッとなると見さかいがなくなるところは、ふたりともそっくりだった。言いだすと決して自分からひくことのない娘に、母は目についたものを片っ端から投げつけた。キャベツにぞうきん、掃除機……。母娘ゲンカのたびに磯谷家は戦場と化した。そのたびに被害を被るのは弟の民教だった。どちらについていいかわらず、不安げな表情で見守っていると、決まって後片付けを手伝わされた。姉の由佳里は、我関せずで自分の部屋にこもっていた。父の猛は黙っていた。小学校の教師をやっている猛は、学校で子供を叱る機会が多いせいか、娘の扱いに慣れていないせいか、家ではだんまりを決め込んでいた。

ところが、その日はその父親がキレた。

「行くと言ったら行く！」

「ダメと言ったらダメ！」

頑としてひくことのない娘と母親のやりとりに業を煮やした猛は、居間のソファをむんずとつかむと、台所に向かって投げつけたのである。

これには有希も一瞬ひるんだ。だが、同時に亮子もひるんでいた。有希は母親の一瞬の隙をつくと、バッグを持って駆けだした。

「ちったん……」

泣きだしそうな民教の顔がちらと見えたが、かまってはいられなかった。

外は吹雪だった。頬を切るような北風と大粒の雪が唸り声を上げていた。

有希はきゅっとマフラーを締めなおすと、電話ボックスを目指して駆けだした。

「もしもし……?有希。うん、なんとか家は出てきた……」

罪悪感がなくもない。去年までは、家族と過ごすお正月も楽しかった。だが、今の有希にとっていちばん大切なのは、大切な人と過ごす時間だった。新しい年を、ふたりきりでむかえたかった。

待ち合わせした場所に着くと、彼が待っていた。

有希は高鳴る鼓動を抑えきれずに彼のもとに走った。

だが、彼はひとりではなかった。

居酒屋で明け方まで飲んだあと、初詣に行った。友達の友達までひきつけて、何人もの団体で。

(来年はふたりっきりで来られますように……)

亀田八幡宮に手を合わせた。有希、13歳の冬である。